

上総道学の特質について

大久保 紀子

序

上総道学は、享保十二〔一七二八〕年に上総成東の鈴木養察と和田義丹が、江戸の山崎闇齋学派の儒者、稲葉迂齋に師事して儒学を学んだことに始まる。その学統は昭和三十年まで脈々と続き、学徒の数は確認されているだけで八十九名にのぼる。上総道学の基礎を確立したのは迂齋の子、稲葉黙齋である。黙齋は、天明元〔一七八二〕年、五十歳を機に江戸から上総に移り、上総道学の第二世代にあたる門人達に儒学を講じて一生を終えた。上総における黙齋の門人は十九名⁽¹⁾で、代々名主をつとめる家柄の者、医業を兼ねる者、博徒のような前歴を持つ者などさまざまであった。

黙齋の門人達の中には、黙齋の紹介によって藩儒として取り立てられた者もあったが⁽²⁾、それは、結果としてそうなっただけのことで、学問することによって生活の資や名利を得ようとしたのではなかった。その意味で、彼らの学問は、その頃上総でさかんだった和算や俳句と同様に趣味の一つであった。彼らは誰に強いられることもなく、また何の見返りを期待することもなく自発的に学んだのである。

山崎闇齋学派の儒学は、あらゆる存在、事物の根拠である理を知り窮める学問である。世界は理から始まり理に収束する壮大な体系であり、人は内在する理を介してその体系の中に位置づけられる。この構造と経緯を筋

道を立てて明らかにすることによって、自己のあるべき姿を知ること、純粹な知的喜びであった。世界が新しく意味づけられて眼前に開け、その中に自己がはつきりと位置づけられていることを知った時、門人達は「手の舞い、足の踏むを知らず」⁽³⁾と述べた程明道と同じ喜びを味わったのである。彼らはこの知的喜びに促されて儒学を学んでいく。

本稿は主に黙齋とその門人達の著作によりながら、上総道学の特質について考察する。はじめに、江戸の儒学と比較することによって、上総道学の基盤が学徒としての自覚と純粹な意欲にあることを示す。次いで、上総道学の内容を必要な限りにおいて説明し、それが門人達および地域にどのような作用を及ぼしたかを具体的に考察することによって、上総道学の特質を明らかにする。

一 江戸の儒学との対比

黙齋によれば、当時の江戸の儒学は形骸化していた。⁽⁴⁾意欲を持たない儒者達による、表面を形式的になぞるだけの儒学が横行していたのである。それに対して、上総には自己、および世界を理においてとらえることに純粹な喜びをおぼえ、みずからの在るべき姿を実現していこうとする学徒達があった。本章では、黙齋の著作によって当時の江戸の儒学の実状を把握し、それと対比することによって、上総道学が学徒としての自覚と学問に対す

る意欲に支えられていたことを明らかにする。

1 江戸の儒学の形骸化

黙齋は、当時の江戸の儒学を無能な儒者達による無用な学問であると批判して、次のように述べている。

儒官ト云道具ニナリテ、折節ハチトギボツク儒者ガ、公儀ノ儒医諸出家ト並ブヲ慍リ、我々ハ上下役ジヤナド、格式ノ争ヲスル輩モアリケレトモ、何格何並ト上下キテ役人ト同坐シテモ俗ノ儒官ノ議論見識、中々以テ医者ノ病人ヲ直スホドノ手柄ミヘズ。見台ニ向テ述ル理屈モナンノセンモナキコトトモナリ。(中略)世ニ入用ナキモノトナレバ是非ニ及ズ、又入用ナレバ今日ノ学者百人ニ一人役ニ立ベキコト竟束ナシ

(『寸虎録』)

儒官は、自分達は格式上「上下役」であると虚栄を張っているが、実際は医者ほどの実質的な功績をあげることにはできず、役に立たない理屈を講釈するだけの「入用ナキモノ」である。たとえ儒官が必要とされたとしても、その任に堪える儒官はほとんどいないと黙齋は見ている。事実、「儒者ニ政事ヲアツケテタルモノカト云」われていることを黙齋は記し、「儒者ト云ハ政ヲスルハズノ者也。カク云ハル、ハヨク「役ニタ、ズ多キユヘナリ。」と付け加えている。

右の引用文には、社会的地位を笠に着て気位だけは高いが、実質的な成果をあげることができない儒官のありさまがよく表現されている。江戸には儒学がまがりなりにも社会的な地位と結びつく機構が存在し、そのことが、逆に、儒学の充実をさまざまに結果となつていたのである。

また、次の引用文に見られるように儒学をめぐる固定観念や先入観が学問の十分な達成をはばむ傾向も見られた。黙齋は、儒学といえはこうい

ものという観念にとらわれ、その形だけをとりつくろうに懸命で、内容がともなっていないことに気づかない学徒のありさまを次のように述べている。文中の「タマノ人」とは、豪快、かつ清新な気風に満ちていた山崎闇齋、およびその高弟達の世代に対して、いちじるしく覇気を欠く当代の儒者達を批判しての言葉である。

今日吾党ノ学者ハ一体ガタマノ人デ、程朱ノ手段ヲキ、オボヘ、ソレデ裱具ヲヨクシ、掛物ニシテ置ク。茶湯ノタテヤウ一々利休ノシタヤフデ、サテ湯ガタギラズ。料理ノ献立一々ヨクテ、サテ肴ガフルイ。ソレハナゼト云フニ、ホンノコトヲ知リスギタノナリ。ホンノコトヲ知リスギタト云ハイカ、シキ様ナレトモ、ヨスギテ不相応ナリ。タトヘ、バ聖ヲ以テ志トストヲボヘテ志ハ大ノヤフナレトモ、ソレハ迂詐カアホフノニツナリ。

(『寸虎録』)

「ヨスギテ不相応ナ」ものを教えこまれて一つ覚えのようにそれにならうと、表面的には立派でも役にたたない、精彩を欠いた儒学になってしまう。それが儒学の空洞化を促進していると黙齋は見ている。たとえば、儒学といえは聖人だと聞き覚えて、無自覚に聖人を目指すと、結局、内容のともなわない形だけの聖人、すなわち「徳の賊」に終わってしまう。黙齋は、それを「迂詐」か「アホフ」のすることだと述べている。

黙齋の考える儒学とは心身に獲得される生きた学問であった。「掛物」のような飾りではなく実質的なはたらきをもち、いつも新鮮で「タギル」ように生き生きとした作用を及ぼす学問である。「程朱ノ手段」の字面だけを学ぶのではなく心身に獲得される学問、むやみに聖人という高い目標をかかえてそれを空虚に真似するのではなく、分相應をわきまえて地道に在るべき姿を実現していく学問。それを黙齋はめざしていた。

2 上総道学の基盤 — 自覚と意欲 —

上総には、黙齋がめざした学問を促進していく下地がそろっていた。門人達は、儒学をめぐる固定観念や先入観にとらわれることなく、黙齋の説く「士」たる自覚の上に立ち、内発的な意欲に促されて学んでいく。

(1) 「士」であることの自覚

江戸の学徒達は、無自覚に聖人をめざして、結局は「徳の賊」という欺瞞を呈することとなった。それに対して、黙齋は、まず「士」であることを自覚し、「賢」を目指すことから始めよと説く。この「士」とは武士のことではない。黙齋が「士トハ学者ナリ、儒者ナリ、面々ノコトナリ。武士ノ士デナシ」と述べているように、儒学を志す学徒はみな「士」である。「士」の学問の目的について、黙齋の門人、鈴木養齋は「此ノ身ヲ、本ノ人ニスルコト」であると述べている。「本ノ人」とは、人の本来の在り方、つまり、理そのものの在り方を実現している聖人にほかならない。「士」は聖人たることを目指して学ぶ。黙齋は、その聖人に至る階梯として、志はあくまでも聖人に置きながらもまず、賢人たることを目標とすべきであると述べる。

聖を以て志と為す。然れども士は賢を希ひ、復、聖を願ふと言はず。

〔牛島随筆下〕

黙齋が言わんとしていることは、目標はあくまでも聖人に置きながら、「士」という分を守って地道に充実をはかるべきだということである。それが賢人たることを、ひいては聖人たることを可能にする道であり、また、そうして分相應の内容を積み重ねて行くことが儒学の形骸化を防ぎ、学問を充実させることになる。黙齋は考える。

上総道学はこの指針が実践された事例である。いわば儒学の辺境であつ

た上総には、江戸のように儒学がまがりなりにもその一端をしめる社会的な機構は存在しなかった。したがって儒学が名利に結びつくことはなく、また、そうした機構にまつわって醸成される固定観念や先入観に染められることもなかった。上総には江戸のように表面的な形にとらわれず、また無用の自負や矜持によつて妨げられることなく、儒学の内容そのものを地道に学んでいくことを可能にする地の利があつたのである。

上総の門人達は、何ら社会的な影響を受けずにただの学徒として、また、ただの農民として淡々と学ぶことができた。彼らは、「士」たる自覚をもつて学び、農民としての生活に「士」として臨んでいく。上総の学徒達は、農民という身分のほかに「士」というもうひとつの身分を獲得したのである。それは、実利には結びつかない純粋な趣味上の身分であつた。しかし、それによつて、門人達は聖人をめざす途上にみずから位置づけ、日常生活を聖人へつながる道ととらえることによつて充実させていくことができた。上総道学は門人達の生活にこうした充足感をもたらしたのである。

(2) 純粋な意欲

黙齋は、学問を志す者に不可欠なのは純粋な意欲であると考えている。それは、強いて学ばされることの多い武士階級ではなく、一般人にこそ見いだせるものであつた。黙齋は、江戸で、ある武士から近年儒学の講義が盛況であることについて問われて、次のように答えている。

席上一士人、今ハ学問ハヤルト云。曰儒者ハヤルト云ハ法華坊子根性デ、ソレヲ手前ハ用ヒヌ。講席口ノ戸外ニ雪駄ガ多イト云ハカリノコト。サレトモ其内ニハ、「誠の道に入るぞうれしき」コトカアルモノナリ。凡民ノ俊秀ハ格別ノコト。領分ノ者ヤ家中ノ子弟ハ上カラ声ヲカケネハ自ら興起ハセヌ。ソコバカリノコトナリ。〔再旬紀行〕

黙齋は、学ぶ者の数ではなく、学問に「誠の道に入るぞうれしき」とい

う喜びがあるかどうか問題であると考える。内発的な意欲によって学んでいるのか、それとも、「自ら興起」するのではなく他律的に学ばされているのか。それが学問の成否を左右する。武士階級は後者であるために多くを期待できないのに対して、一般人の俊秀は純粹な意欲をもっているが故に大成を期待できると黙齋は考えるのである。

上総道学の学徒達がすべて俊秀であったわけではなかった。しかし、彼らは純粹に学びたいという意欲によって学んでいる点において、黙齋の眼鏡にかなったのである。それに反する例として、上総における門人の一人である長蔵⁽¹⁴⁾をあげることができる。長蔵は優秀で、黙齋の紹介によって館林藩の藩儒となった。しかし、藩儒として過ごすうちに「志」、つまり純粹な意欲を失ってしまったことを黙齋は次のように嘆いている。

此比ハ長蔵ナドガ兎角ウツカトシテ総体ウツラヌ。ヨレガ処ニ隨身ノトキト違フ。(中略)大名ノ館モ山林モ同コトナハツナレドモ官トナルト志ヲ奪ハレルト見ヘル。(『再旬紀行』)

長蔵は、上総で「ヨレガ処ニ隨身」であった時の進境ぶりと異なつて藩儒となつた今は「総体ウツラヌ」ようになってしまった。学を志す意欲は本来どこにいても同じはずであるが、長蔵は藩儒という官職についたために、純粹な志を保ち得なくなつてしまつたのであろうと黙齋は見ている。長蔵は、黙齋によつて「長蔵モ先生ブルハワルイ⁽¹⁵⁾」と批判されているとおり、学問の推進力となる純粹な志も、また、学問を志す「士」であるという自覚も失つていたのである。

一方、同じく黙齋の門下から丸亀藩の藩儒となつた林潜齋⁽¹⁶⁾は、生涯学を好み、たゆむことなく学び続けた。黙齋の門人となる以前から「書を読むを好み、農隙に郷師に従ひ学を受け、百家に出入りして、博雑条無し⁽¹⁷⁾」という人物であつたが、晩年、心中を次のように記している。

今老ゆ。能く為すこと莫し。然るに、中夜平旦、尚ほ故きを温ねて心

を革め、斃れて後止まんと欲するもの有り。

(『稲葉黙齋先生傳附録 林潜齋事略』)

老いてよく学び得なくなつた今でも、なお、真夜中に、また夜明けの心の中にふつふつとわき興ってくるものがある。最期まで学問に突き進まんとする衝迫である。それが潜齋の学問の原動力であつた。形骸化した江戸の儒学とは対照的に、こうした「タギル」意欲が上総道学を支えていたのである。

二 儒学の魅力

儒学を学ぶことは、門人達に何の実利ももたらさなかつたが、それは、逆をいえば、実利がなくても一心に学びたくなるほど儒学は魅力的なものであつたということである。儒学は門人達に新しい世界観を提示し、内面的な充足をもたらした。それにひかれて門人達は学び続けたのである。

門人達は、知行にわたる研鑽を積み重ねることによつて、理そのものの心を保ち、理を規準とする在り方を体現することを目指す。理そのものの心を保持することによつて、理にかなつた、人として自然にして当然な在り方が実現される。それによつて、人は天地に充滿する理の流行と呼応し、その化育に参与すると考えられた。儒学においてほかにこのような規模の大きさで、かつ緻密に人の在り方を示し、また可能にするものはなかつたのである。

1 理そのものの心

理そのものの心を保つための修養が誠意、正心である。理そのものの心、すなわち理なりの心とは、黙齋によれば、「思ノ正シイ」心のことであり、

その「正」の内容については『大学』の正心を手がかりとして知ることができる。⁽¹⁸⁾ 本節では、黙齋の門人鈴木養齋、および孫弟子にあたる伊庭静一⁽¹⁹⁾が『大学』の誠意と正心⁽²⁰⁾について述べている文章によりながら、上総の門人達が理そのものの心についてどのように理解していたかを明らかにする。

正しい心を実現するためには、格物致知だけではなく誠意、正心の修養が必要である。⁽²¹⁾ 以下、順に、鈴木養齋による誠意と正心についての文章、伊庭静一による誠意についての文章、同じく伊庭静一による正心についての文章をあげる。

トカク誠意正心ハ皆心ノ工夫ニテ候へ共場処ガチゴウニテ候。誠意ハ一念ノ動クハナニテ物格知至^{マツ}ノ通りニユカズ、或ハ自欺クコトアルヲ母ラント工夫スルニテ、正心ハ事物ノ来ル処^{マツ}デノコトニテ候。

(『答岩崎万郎君』)

両葉ニシテ絶チ、螢火ホドノ処^{マツ}デ自己ノ私ヲ去テ天理ヲ存スルコトニテ候。コゝガ誠意ノ功夫ノ場処ト奉存候。ソレユヘ慎^レ独ト御座候。

(『再答布施君誠意正心之説』)

鏡モ秤リモ、ウツサヌ前ニ物ナク、カケヌ前ニ物ハナイ。来ルナリニウツシ、来ルナリニカケルハ節ニ中ルノ和ニテ候。

(『再答布施君誠意正心之説』)

誠意は「一念ノ動クハナ」、つまり情意が起こつた時点での心の吟味で、「物格知至^{マツ}ノ通りニユカ」ない心をただしていく。己発の段階の省察である。「慎^レ独」とあるとおり、みずからの内面を厳しく精査し、理に反するものを「両葉ニシテ絶チ、螢火ホドノ処^{マツ}デ」排除して、理なりの心を実現していく。

それに対して、正心は、未発の段階の存養である。「事物ノ来ル処^{マツ}デノコト」とあるように、どのような事物が来たつても、それに対する態度や

行為がその事物に応じた最もふさわしいものとなるよう、心を理そのものの状態に保つ修練である。具体的にいえば、「鏡モ秤リモ、ウツサヌ前ニ物ナク、カケヌ前ニ物ハナイ」とあるとおり、何も映っていない鏡のように、また、何も掛けていない秤のように、まっさらで動きのない心を保つ。理そのものの心が保たれていれば、どのような事態にも自在に、かつ最も適切に対応することができる。「来ルナリニウツシ、来ルナリニカケル」ということが可能になるのである。まっさらな心は事物を「来ルナリニ明らかに映し出し、妄動しない心において量針は正しく振れて事物の軽重を違うことなく示すであろう。そこに、理にかなつた行為、在り方が生まれる。それが「喜怒哀楽方節ニ中ル」ということである。

2 理そのものの心から生まれる行為、在り方

理そのものの心を保つことによつて、人として自然であり、かつ当然な行為、在り方が実現される。それは、天地における理の流行と感応し、その化育に参与すると考えられた。門人達は、このように理という觀念によつて日常生活に普遍的な意味が与えられ、存在が天地の規模の中に位置づけられることにひかれて、学び続けたのである。

(1) 自然にして、当然、かつ必然的な行為

理そのものの心が保持されていれば、事にあたつて、判断や選択の余地なく即座に理そのものの行為、態度が現われる。このことを伊庭静一は次のように述べている。

ソコデ誠意ノランヅマリガ、善ヲ好ムコトモ勉強シテツトムルヤウデハ誠テハナイゾ。誠ト云ハノドノ渴クニ湯ヲ呑ミ、ハラノヘツタトキ飯ヲ食フ。チツトモ人ノ口^{マツ}デナヒ、アトサキ見合セル間ハナヒ。計較

安排ハナイ。渴クナリニ飲ミ、餓タナリニ喰フ、誠ゾ。直方先生ノ「湯ヲ呑ム二十分カワイタハ茶碗ノソコニコラス。ソコガ誠ゾ」ト。

〔「再答布施君誠意正心之説」〕

修養を窮め尽くしたところの誠意とは、「勉強シテツトムルヤウ」なものではない。「ノドノ渴クニ湯ヲ呑ミ、ハラノハツタトキ飯ヲ食フ」ように、自然にして、当然、かつ必然的な行為、態度としてあらわれる。「アトサキ見合セル間」も「計較安排」もなく理が発現する。

しかも、あまねく流行する理が発現するに、時も場所も選ばない。理そのものの心にとつては、あらゆるところ理の充滿があるだけであり、その時、その場がみな、当然なのである。人であれば「百姓ハ米ヲ作ツテ、御年貢ヲ上納シ、武家ハ武芸ヲマシテ君ニ忠勤ヲ尽ス」というあたり前の行為が、天理そのままの充実しきつた完璧な状態だということになる。顔淵は「單瓢陋巷」の生活を従容と受け入れた。それと同様に、たとえ「女房ハ産子死、乳ノミ子ハアリ、金ハナシ、米ハナシ」という惨憺たる状況であつても、幸福な状態と同様に「泰然」と受けとめ得る。²⁰⁾ 充滿する理のうちにあつて、それ以外の在り方はあり得ないはずだからである。

(2) 天地の化育に参与する

理そのものの心は、次の尚齋の例が示すように、天地に流行する理と感応する。

三宅先生ノ硯箱ニ糊ノアルテ雀ガ来タ。財色ヌケタホドコハイモノハナイ、雀ノ来タ先生タ。ソコテ狐狩ヲセウト云ト、狐ガ恐レタ。其玉シイガ君臣之義ニ出ル。コレガ吾党ノ先輩ノ尊ヒ処タ。ソナコトヲバ知ラズニ、只三宅先生ノ筆記ヲ写シテ講釈ヲヨクシヤウト云。ソレガ何ニナルモノゾ。
〔「黙齋先生排積録講義」〕

「財色ヌケタ」とは不純物が一切とりはられ理そのものと化している

状態のことである。それを感知して、尚齋のもとに親しげに雀がやってきて安らぐ。また、尚齋が老婆をあやめた狐を退治せよと声明したとたん狐達がおびえる。尚齋というよりも、仁という理が雀を愛し、義という理が狐退治を命じているのである。理そのものと化した心には天地のあらゆるものが己の手足の延長のように感覚され、また、あらゆるものが全く隔たりなく感応してくる。尚齋の場合、「君臣之義」も単なる知識の実践ではなく理そのものと化した「玉シイ」の発現であり、そこにあらゆる事物、存在との理における感応が実現するからこそ義が力を發揮するのである。儒学は、「筆記ヲ写シテ講釈ヲヨクシヤウト云」ような表面的な知識にとどまる学問ではない。天地に、また人事にあまねく一貫する理を身をもつて体現することをめざす学問なのである。

門人達の研鑽も天地における理の流行と軌を一にし、その化育に参与することまでを射程に入れてなされた。このことを黙齋は次のように述べている。朱子の「幽明巨細無一物之遺」という言葉の解説である。

天地位シ万物育スト云ト大キナコトト思ヒ、致知格物ト云ト小サイコトト思フガ、大キナ了簡違ヒ、天地宇宙一理而已ノ時ニチガイハナイ。
ソコヲ幽明巨細無一物之遺ト云タモノ
〔「黙齋先生排積録講義」〕

理は天地宇宙の幽明巨細にわたつて一貫しており、その規模の大小は問題ではない。「一理而已」という觀念によつて、あらゆる存在、事物が理において一つとなる。一学徒の学問が、あるいは、その行為、在り方が直接天地の化育と連動するのである。理そのものの心を保つとは、天地における理の流行と感応し合つて、天地の化育に参与することなのである。

(3) 充足した人間関係

理そのものの心を保つことによつて、あらゆる時、あらゆる場が充足に

満ちたものとしてとらえられるようになる。たとえば、直方は「親旧に病累有りて、乃ち夜間、之れの為に將護、加衛して且に達するも亦樂し」と述べた²⁰⁾。一般的には辛苦でしかない徹夜の介護も、理そのものの心を実現している者にとっては充滿する理と呼応する、充足の一時なのである。したがって、「樂し」い。

その充足感ほ周囲の者をなごませ、暖かくつつみこむ。黙齋は、陶淵明が親戚との情話を飲んだことについて次のように述べている。

陶淵明ノ親戚ノ情話ヲ悦フヲ思フガヨイ。(中略) 歛親戚ノ情話ガ旨点ノ氣象ガアル。親戚ノ中ニ馬鹿ナ男モアル。疝氣ノ毒ダト云程ナモアロフ。ソレニ情話ヲ悦ヒシンミニナリテフツクリトスル。コ、ハ滋味親切、ムマイコトジヤ。夫ニ今ノ学者ガ書物ヲイジリマハス位ノ学問デモ親ヤ親類ニキブイモノダト見ラル、ハ陶淵明ニキツイマケヤフゾ。
(『清谷話録』)

曾点がとりたてていうほどのこともない日常の中に理を見いだして楽しんでるように、陶淵明は「馬鹿ナ男」との会話を、また「疝氣ノ毒」ではないような男との話を歎ぶ。「シンミニナリテフツクリトスル」のである。儒学という学問は、このように人間関係を潤し、充実させるはたらきをもつ。それなのに「書物ヲイジリマハス位ノ学問」をしているにすぎないのに、親や親類から「キブイ」ものだと思われるのは、陶淵明にはるかに及ばない恥すべきことだと黙齋は述べる。

黙齋が批判している「筆記ヲ写シテ講釈ヲヨクシヤウト云」う学問、あるいは、「書物ヲイジリマハス」学問とは、一で述べた形骸化した江戸の儒学そのものである。それに対して、黙齋が説き、上総道学の学徒達がひかれ、学び続けた儒学は生きた学問であった。儒学の知識が心身に獲得されることによって理そのものの心が実現される。それによって、心は天地における理の流行と生き生きと感応し、日常の生活のその時、その場が限

りなく充足したものとなる。そういう儒学であったからこそ門人達は実利ぬきで学び続けたのである。

三 上総道学のはたらき

本章では、はじめに二で述べた内容を学び修めることによって門人達が理に対する自覚を高め、理に拠って判断し行為する主体性を身につけたことを明らかにする。次いで、そのことが地域の共同体の中でどのように作用したかを黙齋、および門人達と地域住民との関係を例にとり、具体的に明らかにしていく。

1 理に対する自覚と主体性

二で述べた魅力にひかれて学ぶうちに、門人達の心におのずから理に対する自覚が芽生え、理に拠って判断し行為する主体の確立が促された。たとえば、黙齋の居住する清名幸谷の檀寺の僧が、黙齋に儒学を講じることをやめるよう強く申し入れてきたことがあった。門人達が仏教を非難するために人々が信仰心を失うという弊害が出ているというのである。僧に対して黙齋は次のように答えている

余、云ふ、「吾、未だ嘗て門人に檀師を軽んじ、祈祷を廃することを教へず。但し、吾が門に遊ぶ者は一年半歳の間に、概ね自ら天堂、地獄無きを悟る。蓋そ亦以て然らざらんや。吾、固より其の自ら悟るを禦く能はず」と。
(『卻生徒説』²¹⁾)

門人達の「檀師を軽んじ、祈祷を廃する」態度は、師である黙齋が教えたのではない。それは、何よりも彼等が「自ら悟」った結果なのである。理という規準に拠って事態をとらえ、判断する訓練がこうした主体的な判

断を可能にする。

また、寛政元「二七八九」年の早魃²⁹の際には、門人達が理に任じた行動をとって地域の水争いを未然に防いでいる。門人達は、先に述べたように、天地の化育に参与しているという自覚をもって、辛苦しながらも人として当然の行為をなしたのである。

最初に、黙齋の早魃についてのとらえ方を紹介しておく。先に述べたように、一学徒の在り方は天地における理の流行と連動していた。そうだとするならば、早魃という変は理の一端として在る個人がその責任を負うべき事態であり、みずから理において省み理に徹することによって、理なりの当然の事態が回復されるようつとめなければならないはずである。黙齋は、次のように述べて門人達の自覚を強く促している。

風雨不時ト云コトヲ昔カラ大君執政ノ御政ノカケト云ナスガ、ソウ斗リハ云レヌ。今年ノ早魃ナドハ、ソシナアヤデハナシ。(中略)今町人百姓ガナンデモカデモスマシタ顔ヲシテヲル。「早魃、ホ、イヤナモノ。サレドモ死ヌコトデモアルマイ」トスマス。縮緬ヲ羽織ハ小紋ニシテモナラスノト御触、「ホ、キビシイモノ。羽織ヲ仕廻テヲケ。又ソフモアルマイ」ト高ヲク、ル。世上ノ人ガ虚傲デスマシテヲル。天ノ思召ニ戻ル処ジャ。物ノ直段ノムセフニ高ヒモソレナリ。今年ノ早リハ下ノモノ、高ブリカラ出タコトト思ヘ。(『清谷話録』)

天変地異は決して失政によるのではない。早魃も物価の高騰も「虚傲デスマシテヲル」「下ノモノ、高ブリ」のためであると黙齋は考える。「町人百姓」達の「ナンデモカデモスマシタ顔ヲシテヲル」あるいは「高ヲク、ル」態度は「天ノ思召ニ戻ル処」であり、「天」つまり、理に対してもつと自覚的でなければならぬと黙齋は考える。

黙齋は雨乞いの祈祷が効果をあらわさないのも、祈る者の自覚と責任感、そしてそれらの根底をなす誠意が充分でないからであると考える。以

下に引用するのは、寛政三「一七九二」年前後の豊作の年に、黙齋が講義後、門人達に語った言葉である。

祈雨祈晴キクコトジヤ。近年村々テ雨乞ヲスルヲ見タニ、タレデモ誠心ニナラセタヒト任スル底ナモノハ一人モナイ。只酒ヲ飲フト云テ出ルノナリ。(中略)大勢ヨツテ百姓力是呼雨ヲト一心ニ祈レハキクコトジヤガ、其一心ハナイ。(『清谷話録』)

早魃の責任をみずから負って、誠意をきわめて祈れば天地も感応するはずである。しかし、近年の農村の祈祷では、理に任じ誠心を尽くして一心に祈る者は一人もない。ただ、酒が飲みたくて集まってきている。理そのものの心から為される祈りならば、その誠意がかならず天と感応し効力をあらわすはずなのである。

このように自覚を強く促し理をもって任ぜよと説く黙齋に対して、寛政元年の早魃の際、門人の萩原惟秀と中田重次は自覚的、かつ当然の行為をもって応えた。黙齋はその行為をよしとして易の「蹇利西南³²」という言葉を彼等に贈った。その時のことを門人は次のように記している。

六月十五日、惟秀、重次云「当年旱損ユヘ、百姓共ノ水イサカイナキ為メ、某等小前へ一人別ニ水引渡シタルユヘ、久シク面拜ヲカキ候」ト申上ル。先生曰、「コレ当然ノコト、活潑々地、定メテ辛勞ナラン」。重次云、「百姓多欲ニ水ヲ盗ムニ怒ルコト多カリキ」。曰、「悪不仁甚者乱也。殊ニ同役同士ナドノコト、手ヒドク云テハアトノ仕廻ノツカヌモノ。此節ハトヤカクヤカマシク云ハヌ、只当然ヲツトメルカヨイ。此掛ノ心得ガヨイゾ」。ト書ヲ惟秀等ニ賜フ。(『清谷話録』)

門人の惟秀と重次は、「水イサカイ」を未然に防ぐために、講義を休んで新しく用水路を引く作業をした。ほかの百姓達は多欲で水を盗まれることには過敏なのに、みずから進んで水を引く労は厭う。二人はそうした百姓達を「手ヒドク」非難したり、責めることはしなかった。「悪不仁甚者

「乱也」³³⁾を地でいくことになってしまふからである。彼等は事態を理に照らしてよく吟味した結果、過激な行動に走つて共同体を乱すことを避け、みずから黙々と個別に水を引くという道を選択する。黙齋はそれを「当然ノコト」、「活潑々地」であると高く評価し、「辛勞」ではあるが「当然ヲツトメルカヨイ」と述べて、「蹇利西南」の言葉を贈つて励ましたのである。

2 地域との関係

しかし、門人達の行為が住民達の反感をかい、両者の間に軋轢が生ずることもあった。黙齋はそれを自覚し、儒学を学ぶことが地域共同体を混乱させたり、門人達の家庭の和を損ねたりすることのないよう充分に配慮している。門人達は黙齋の教えを守つて、陶淵明のようになごやかで充実した人間関係を実現するように努めたと考えられる。しかし、門人鈴木養齋の例に見られるように、仏教勢力、および地域住民との関係が極度に悪化してしまう場合もあった。儒学を学んでいることが、仏教勢力の実益に反するとみなされたからである。その結果、養齋は、仏教勢力、および地域住民から甚だしい実害をこうむることになった。

(1) 黙齋の自覚

黙齋は、儒学を学ぶことが地域の共同体を乱したり、門人達の家庭を不安定にしたりすることを恐れ、不穏なきざしが見えると泰然と身を引いた。黙齋は清名幸谷の居宅の隅に、常に草鞋を掛けていた。門人にその理由を問われて「我、若し里人に合はざれば、則ち日を終ふるを俟たずして去らんと欲し、為に予め備ふるのみ」³⁴⁾と答えている。もともと地域の人々との折り合いが悪くなった場合は、即刻立ち去る覚悟だったのである。黙齋は、鶴澤家の保護のもとに清名幸谷で一八年を過ごしはしたが、地域の

共同体にとけ込んではいなかった。上総移住後、黙齋がしばしば「隠者」と自称していることから明らかのように上総は黙齋にとって隠遁の地であり、そこで共同体の成員として認められようとは思っていなかったのである。黙齋は、終始よそのものであった。

黙齋は寺と衝突した場合でも、また、地域の管理責任者である名主の不当な行為に直面した場合でも、事を荒立てず穏便を旨として身を引いた。先に述べた清名幸谷の檀僧が黙齋に儒学の講義をやめるよう強く申し入れてきた事件では、結局離檀し教授をやめる決意をしている。³⁵⁾

また、黙齋は、儒学を学ぶということが門人達の家庭を不安定にすることのないよう細かく配慮していた。たとえば、五郎兵衛という門人が講義を欠席しがちなことについて、黙齋は次のように述べている。

五郎兵衛ガ講積二出ヌハ、オレガ考ニ、モシヤ女房モ懐妊ソフナ。アノ家ガ元ハ大ノ仏者デ親ハ信者ジヤ。二度目ノ子ガ死シタトキ、坊主ガ経ヲ書テ罪ヲ滅セヨト云テヤツタト云。講積二出ヌハスコシハ仏ノ遠慮テモアロフカ、又女房ヤ家内ノ方ハ出サヌガ気ゲンヨイ筈、トカクス、メヌコトジヤ

(『清谷話録』)

黙齋は、儒学を学ぶことよりも、五郎兵衛の家庭の和が保たれることを重くみている。日常の生活が平穩無事であつて、はじめて儒学にいそむことが許される。黙齋は、繁忙期には門人達を農作業に就かせ、五郎兵衛のように家庭の事情がある者には決して講義に出ることを強要せず、あくまでも家庭、地域の平穩を最優先したのである。黙齋が門人達に望んだのは、直方が示唆し、陶淵明が実践した和氣藹々たる人間関係であつた。

(2) 鈴木養齋の事例

鈴木養齋の場合は、仏教勢力、および地域住民との対立関係が約十年も続き、ついに公事にまで及んでしまった例である。資料が鈴木養齋の記述

だけであるため、事件の内容を正確に把握することは困難であるが、儒学が実質的な否定的作用を仏教勢力や地域住民に対して及ぼすとみなされた場合、強い反撃を受けることを示す事例である。

事の発端は、黙齋の場合と同様に、養齋の門人達が仏教の教えを否定したことにあった。文頭の「後」とは、黙齋に師事し黙齋が亡くなった後、ということである。

後、書を我茅舎中に講ずること二十余年、仏を排斥するに非ずと雖も、而れとも、郷里近村自ら仏の教への人倫を滅却し、地獄極楽因果輪廻の説を立てて以て人を欺くを知ること有りて、人倫を尚び恩を悖し義を守る者亦多し。遂に、寺僧を尊崇し金帛を以て布施し錢穀を以て供養するの心大いに衰ふ。是に於いてや、寺僧および仏に佞する者、大いに余が学を厭ひ、或いは一二の国を助くる者、余を惡むこと有りて終に癸酉の厄有り

(『示三子』)

「郷里近村自ら仏の教への人倫を滅却し、地獄極楽因果輪廻の説を立てて以て人を欺くを知ること有りて、人倫を尚び恩を悖し義を守る者亦多し。」とあるように、養齋の講授する儒学は仏教の教えが虚偽であることをさとらせ、人倫を大切にすることを教えた。しかし、このことは、儒学と仏教を対比するとすれば、どのような場合でも指摘される一般的なことからであつて、特に目新しいことではない。右の引用文から読みとるべきことは、人々が儒学を学ぶ、あるいは儒学の影響を受けるといことが寺の収入の問題に直結していたという点である。儒学の影響によって人々の「金帛を以て布施し、錢穀を以て供養するの心大いに衰」えたのである。寺にとつて儒学を説く養齋を認めるか否かは、信仰上の問題ではなく、寺の収入にかかわる経済的な問題であつた。養齋に対する排斥行動が過激であつたのはそのためである。

養齋は仏教の教えの内容を批判するばかりでなく、寺の「飽食逸居」を

次のように指弾している。

此に於いて寺僧を尊崇し、金帛を以て供養し、錢穀ヲ以て布施し、寺僧以て然と為して堂塔を建立し、仏像を安置して人人をして供養布施せしむるを己か任とし、飽食逸居して以て日を終す。恬然として稼穡の困苦を知らず、衣食の艱難を顧みず、以て仏法独り此くの如き者と為す。嗚呼、何ぞ夫れ此くの如くや。古昔、一夫百畝、国に遊民無ければ則ち之れを生む者衆く、朝に幸位無ければ之れを食む者寡く、以て財恒に足りて大平ヲ致す所なり。今夫れ此くの如し。故に艱苦する者、日に艱苦し、逸樂する者、日に逸樂す。

(『示三子』)

養齋は、僧達が安逸をむさぼり、人々の「稼穡の困苦」や「衣食の艱難」を顧みないことを非難する。養齋が理想とするのは、富が人々みなにゆきわたる社会である。下の者達はみな生産に励み、上の者達はみなしかるべき実力をもつてその職責を果たす社会であれば、遊民もなく、禄を食むだけの無能な者達もないから、産は足りて天下にゆきわたり、太平な世の中になる。しかし、実状は安逸をむさぼる僧達が増えつたかになり、生活に苦しむ人々は、ますます貧しくなるばかりであると養齋は述べる。仏教の思想的内容を批判するだけでなく、社会経済的見地から寺のあり方を批判するのである。

こうした背景があつて、寺僧達とその追従者、および、養齋を快く思わない名主たちは、養齋を強硬に責めたて、その結果、養齋の親族が死に至るといふ事件が起こつた。親族を死から救うことができなかつた養齋に対して、住民達は「余が学を疑ひ」、「聖学を今日に益無き者」と非難する。その後、養齋はやむを得ず名主を勤めることになるが、前名主の年貢隠匿事件に際して適切な措置をとることができなかつたことにより、住民達の信望をさらに失つてしまう。そればかりか、数年後、養齋は、元名主との確執が原因で公に訴えられてしまうのである。

養齋の事例は、儒学が仏教勢力にとって実質的な脅威となった一例である。儒学が浸透することは寺の収入が減ることを意味した。「七里法華」といわれる土地柄で、それが許されるはずはなかったのである。

結語

儒学を学ぶということが名利に結びつくことのない上総の地で、門人達は、学徒であるという自覚と純粹な意欲だけによって学んだ。上総道学の内容上の特質は、門人達の自覚と主体性を養ったということである。儒学を学ぶことによって、門人達は理に対する自覚を高め、理に拠って判断し行為する主体を確立していく。早魃の際の門人達の行動のように、自覚と主体性に基づいて為された行為が地域の共同体に貢献する場合もあった。しかし、鈴木養齋の事例から明らかなように、上総道学は、あくまでも地域の人々の実益に反しない限りで容認されていたのである。

以上、考察してきたことから、上総道学の特質を一言で述べるならば、趣味、ないしは教養としての儒学であったとすることができる。上総道学は、実利にかかわらず純粹な意欲によって学ばれた趣味であった。しかし、単なるなぐさみごとではない。上総道学は、儒学の知識を心身に獲得して、理そのものの在り方を体現することをめざした。門人達は理において人格を陶冶していくのである。その意味で、上総道学は門人達の内面を涵養する教養であったとすることができる。そして、趣味、ないしは教養がみなそうであるように、上総道学も否定的な影響力をもたない限りにおいて容認されていたのである。

趣味、ないしは教養の儒学であると規定することは上総道学を矮小化することにほならない。趣味であったからこそ純粹性が保たれたのであり、内面を充足させる教養であったからこそ魅力的だったのである。

引用文献（引用に際して、表記を改めた部分がある）

稲葉黙齋

『姫島講義』、元倡寺蔵『孤松全稿 一卷』所収

『牛島隨筆 下』、元倡寺蔵『孤松全稿 四卷』所収

『先達遺事』、同右、

『寸虎録』、元倡寺蔵『孤松全稿 六卷』所収

『東帰録』、元倡寺蔵『孤松全稿 七卷』所収

『示二三子談』、元倡寺蔵『孤松全稿 十卷』所収

『見花稿』、元倡寺蔵『孤松全稿 三二卷』所収

『與松倉氏』、無窮会神習文庫蔵『孤松全稿 四三卷』所収

『黙齋先生排釈録講義』、新発田市立図書館蔵

『再旬紀行』、千葉県立文書館蔵

『清谷話録』、慶応義塾大学図書館斯道文庫蔵

『卻生徒説』、鵜澤家蔵

林潜齋

『稲葉黙齋先生傳』、東北大学狩野文庫蔵『淵源紀聞』所収

鈴木養齋

『與二三小子』、池上家蔵『養齋先生諸筆記全』所収

『答岩崎万郎君』、同右

伊庭静一

『再答布施君誠意正心之説』、池上家蔵『養齋先生諸筆記全』所収

『伊庭先生講義自録』、池上家蔵『養齋先生諸筆記全』所収の鈴木養齋『養齋先生曾点章講義』の附録

岡直養

『稲葉黙齋先生傳附録 林潜齋事略』（池上幸二郎編著『吾學叢書第一篇

黙齋先生傳』（一誠堂書店、一九三五年）所収）

注

- (1) 現在の千葉県山武市。
- (2) 東金市編『東金市史七 通史篇下』（東金市、一九九三年）八二頁以下。
- (3) 現在の千葉県山武郡大網白里町清名幸谷。
- (4) 東金市編『東金市史七 通史篇下』（東金市、一九九三年）八二頁以下。
- (5) 館林藩の鈴木恭節（長蔵）、丸亀藩の林潜齋。以下の注で詳述。
- (6) 『近思録』道体篇。
- (7) 拙稿『山崎闇齋学派の儒者の多様性について——稲葉黙齋の著作を手がかりに——』（『お茶の水女子大学 人文科学研究』第五卷（お茶の水女子大学、二〇〇九年）所収）、参照。
- (8) 以上『東帰録』。
- (9) 『孟子』尽心章下。
- (10) 「濂溪先生曰く、聖は天を希ひ、賢は聖を希ひ、士は賢を希ふ」（『近思録』為学大要篇）による。
- (11) 『姫島講義』。
- (12) 『大順堂雜稿 卷之二』。鈴木養齋（明和元「二七六四」年—天保八「一八三七」年）は、名は直二、荘内と称した。別号は空水。鈴木養齋の孫。医を業とした。現在の山武市姫島の人。
- (13) 『平家物語』巻第十横笛からの引用。ただし、「誠の道」とは仏道のこと、黙齋は皮肉をこめて用いている。
- (14) 鈴木恭節。その子恭因の碑文によれば宝暦十二「二七六二」年—天保元「一八三〇」年。生年を安永五「二七七六」年とする説もある。現在の大網白里町清谷幸谷の人。黙齋の上総移居を援助した鵜澤近義の三男。館林藩儒臣。
- (15) 『再旬紀行』。
- (16) 寛延二「二七四九」年—文化十四「二八一七」年。初め花澤文二と称した。名は秀直。現在の東金市堀上の人。丸亀藩儒臣。
- (17) 『稲葉黙齋先生傳附録 林潜齋事略』。以下、この書からの引用文の訓読については、長野美香『林潜齋『稲葉黙齋先生傳』を読む（二）』（『聖心女子大学論叢』第一〇四集（聖心女子大学、二〇〇五年）所収）に拠った。
- (18) 朱子は心の思いの正しいことが即ち天理の流行であると述べている。（「心之思正便是天理流行運用無非天理之発見」『朱子文集』五十九答呉斗南書。『四庫全書存目叢書集部一八朱子文集大全類編一百十七卷（三）』（莊嚴文化事業有限公司、一九九六年）所収、二八三頁。）黙齋はこのことについて次のように注釈している。「心思之正ト云、此ノ正ノ字ガコノ方ノ大切、大学ノ正心ノ正モコレナリ。思ヲ絶テナク、思ノ正シイガ天理ナリソ。」（『黙齋先生排釈録講義』）。
- (19) 伊庭静一（天明六「二七八六」年—明治二「一八六九」年）。幼名浅次郎。金兵衛と称した。号は一貫堂。現在の山武市根蔵の人。医者を業とした。
- (20) 誠意と正心については高島元洋『山崎闇齋 日本朱子学と垂加神道』（ベリかん社、一九九二年）、三〇六頁—三二六頁を参考にした。
- (21) 「サレドモノ格知ノ功バカリデ、或ハ自欺クコトガアル。誠ニスルノ功夫テ自慊ガナル。」（鈴木養齋『答岩崎万郎君』）。
- (22) 『伊庭先生講義自録』。
- (23) 雀と狐に関するエピソードについては『先達遺事』参照。
- (24) 『朱子文集』七十 読大記。『四庫全書存目叢書集部一八 朱子文集大全類編一百十七卷（三）』（莊嚴文化事業有限公司、一九九六年）所収、四八三頁。

(25) 黙齋によれば、幽は目に見えない造化陰陽鬼神の上のこと、明は目に見える仁義礼智信、父子君臣夫婦兄弟朋友の上のこと、巨は親義別序信、細は洒掃應對（『黙齋先生排釈録講義』）。

(26) 『雜記 己巳』。

(27) 熟していない、生のままである（『明解 古語辞典』（三省堂、一九六三年））。

(28) 引用文の訓読については、長野美香『林潜齋『稲葉黙齋先生傳』を読む（二）』、『聖心女子大学論叢』第一〇四集（聖心女子大学、二〇〇五年）所収を参考にした。

(29) 四月三日に大雨が降ってから、少なくとも以下に引用する記事が書かれた六月十五日まで雨が降らなかった。

(30) 篠原惟秀（延享二「二七四五」年—文化九「二八一二年」）本姓は北田。與五右衛門と称した。号は静安。現在の東金市堀上の人。

(31) 中田重次。寛政十「一七九八」年没。十二郎と称した。現在の東金市堀上の人。

(32) 『易経』三九蹇、「蹇利西南不利東北利見大人貞吉」。「蹇利西南」は「蹇は西南に利し」。蹇の卦は艱難險阻が前に横たわり、進むに困難な時である。この困難をぬけだすには、西南の平地に向かつて進むがよい。意味を解釈すれば、困難なことに直面した場合、恐れず身をもつてその中に入り、慎重に考えをめぐらすことである。そうすれば、危険から脱出する希望も生まれ、西南の平坦、安全な場所がいかに遠くてもそこに至ることができるということである。以上、鈴木由次郎『易経下』（集英社、一九七四年）、五頁—七頁を参考にした。

(33) 「人而不仁疾之已甚乱也」『論語』泰伯。

(34) 『稲葉黙齋先生傳』。引用文の訓読については、長野美香『林潜齋『稲葉黙齋先生傳』を読む（二）』、『聖心女子大学論叢』第一〇四集（聖

心女子大学、二〇〇五年）所収を参考にした。

(35) たとえば、寛政六「一七九四」年、館林侯の招きで江戸に滞在した時、逗留期間を延期することを勧める家臣に対して黙齋は次のように答えている。「某上総ヲ出ルトキ、既二十日ト伍保ヘモ届ケタレバ、隠者トテ信ハソムキ難シ」（『再旬紀行』）。

(36) 『卻生徒説』。

(37) 以上、『與二三小子』。